

# 「個の力」の向上 ～共通価値の創造に向けて～

## 増大する建設業の役割と担い手の不足

東日本大震災からの復興に加え、高度経済成長期に整備されたインフラの維持・更新、2020年の東京オリンピック・パラリンピック関連施設の整備、リニア新幹線建設など、これからの日本において建設業が果たすべき役割は、非常に大きなものと言えます。

一方で、少子高齢化が進む日本においては労働人口の減少は避けられず、日本経済の成長にはより高い生産性が求められています。政府が策定した「日本再興戦略」においても、ロボット開発やIoT、ビッグデータの活用等により産業の新陳代謝を促進し、成長に結びつけるとしています。

建設業においても担い手の確保は大きな課題です。日本建設業連合会が発表した長期ビジョンでは、2025年に向けて生産性を10%以上向上させることにより、技能労働者約35万人分の省人化を目標としています。

## 建設業における生産性

日本の労働生産性はOECD加盟国の中でも低く、とりわけ日本の建設業の生産性は、他産業に比べて大きく劣っています。政府統計データをもとに比較したところ、就業1時間当たりでみた建設業の労働生産性は、全産業平均の約60%に過ぎません。

建設業はその都度異なる自然条件において、現地で一品生産することが特徴です。そのため、自動化やロボット化には不

向きであるとされ、それが他産業に比べて建設業の労働生産性が低い理由の一つだと言われてきました。しかし、理由はそれだけでしょうか。私たち建設業では過去の経験を重視しすぎた結果、生産性を向上させる革新的な取り組みを疎かにしてきたことも原因だと私は考えています。

## 個の力とは

建設業は「人」が基盤であり、代々培ってきた「ものづくり」を大切にしてきました。そこでは、OJTを中心とした教育で、働く「人」の能力を高めるとともに、各工程での「改善」を進め、より良いものを安全に、早く安くつくることに注力してきました。しかし、日本の将来を考えると、今私たちに求められている生産性向上とは、これまで行ってきた「改善」の延長線上では達成できないほど高いものです。

この課題に応えるには、BIM<sup>\*1</sup>やCIM<sup>\*2</sup>、ICT技術などの活用はもちろん、従来の発想を超えた新たな生産革新、イノベーションを起こすことが必要だと考えています。しかしICTなどの技術は、ものをつくる上での道具にすぎません。道具を使いこなす革新を実現するのは「人」であり、その「人」を育て、向上した能力を発揮することがより重要なのです。革新を実現する企業には、従来の枠にとらわれない柔軟な発想やリスクを恐れず挑戦する実行力、そして、自分がやるという当事者意識、責任感を持った人材が必要だと考えています。

当社はこれまでも人材育成に重きを置き、社員の能力向上を図ってきました。大きな社会的課題に取り組むために、私は今期、社長方針として「個の力」の向上を打ち出しました。役員を含む全社員の「個の力」が向上することにより、初めて会社の成長があります。その上で社会と向き合っていくことで、これまで以上に、社会からの要請にお応えできるものと確信しています。

### 前田建設がめざすもの

当社は地球も大切なステークホルダーと定め、環境経営に取り組んでまいりました。環境保全は社会の安定の上に成り立つことから、環境問題はもちろん、生産性向上という課題に対しても真摯に取り組んでまいります。私たちMAEDAは「個の力」を高め、建設業における生産革新を実現し、ステークホルダーの皆さまと当社に共通する価値の創造、そしてお互いがより幸福を実感できる未来の実現をめざしてまいります。

※1 BIM (Building Information Modeling)

※2 CIM (Construction Information Modeling)

代表取締役社長

小原 好一

